

装飾の生命力

～モデル・反復・形象を中心とした考察～

美術専攻 先端芸術表現領域

1320917

久木田茜

本稿は、筆者の作品に内在する「装飾の生命力」に着目し、その造形的特質と作品に与える影響について考察することを目的とする。「装飾の生命力」とは、過去に制作された装飾が内包する自然的要素を指し、筆者の創造的な介入を通じて有機的な形態を導き出す力と定義される。本研究では、現代において装飾を主題とする筆者の作品が美術史の中でいかなる位置づけを持つのかを検討し、その文脈の中で「装飾の生命力」がもつ造形性の普遍性を論じる。同時に、装飾を取り扱う作家としての筆者自身の制作態度と、それが示唆する美術的可能性についても明らかにする。

本稿には二つの背景がある。一つは筆者の制作、もう一つは美術史における装飾に関する背景である。

まず、一つ目の背景として筆者のこれまで取り組んできた装飾をキーワードとした制作活動を通じて生じた問いについて述べる。筆者はこれまで装飾を「自然を内包する人工物」と捉え、主に二つのアプローチで制作を行ってきた。一つは既存の装飾をモデルに、その形態を反復し有機的な造形に仕上げる「生成型」、もう一つは植物を用い、過去の装飾文様を参照しながら装飾的な形象を作り上げる「再生型」である。近年は再生型を中心に取り組んできたが、過去の模倣に留まっているのではないかという問いから、生成型に新たな可能性を見出した。生成型の特徴である「モデル」の「反復」を通して生まれる「形象」にこそ、「装飾の生命力」が宿ると考えたのである。

次に、美術史における装飾の問題である。本稿のテーマである「装飾の生命力」に関する既存の研究では、アロイス・リーグル(1858-1905)やアンリ・フォション(1881-1943)の研究が挙げられる。他にも装飾に対して深い精神性や内的な意味を見出す思想は、19世紀にゴットフリート・ゼンパー(1803-1879)を通じて盛んに議論されていた。しかし、装飾は20世紀前後には主にモダニズム思想の潮流から、作品や建築、デザインにおいて不要なもの、として排除される傾向にあった。しかし、この「装飾の生命力」は近年、異なる観点から着目されていると考えられる。例えば、筆者はティム・インゴルド(1948-)が唱える「ライン」の理論に通じるものであると考えている。例えばインゴルドの提唱する概念

メッシュワークは、リーグルやフォションの研究した時代と文化を超えて生成される装飾における生命力に通じるものである。筆者は、現代美術が表現の拡大を追求する時代において「装飾の生命力」は他の学問分野の視点を取り入れつつ、評価されるべきであると考えている。

本稿では、これらの課題に対して、生成型の作品に見られる「モデル」、「反復」そして、このモデルと反復によって導き出される「形象」という三つの要素について着目し、筆者の作品の「装飾の生命力」について考究していく。

第一章では、筆者の作品における「装飾の生命力」について考察する。これまでに述べた筆者の作品の分類「生成型」と「再生型」の共通する要素として「モデル・反復・形象」を挙げ、装飾がどのように生命力を獲得していくのかを分析する。先行研究を踏まえ、装飾における有機的な表現について考察していく。第二章では、装飾をモデルとした他作品との比較分析を行い、筆者の作品におけるモデルの捉え方を考察する。具体的には展覧会「装飾は流転する」（東京都庭園美術館,2017）に出品された三つの作品を比較対象として取り上げ、装飾における象徴性とアレゴリー性に着目することで、筆者の作品における装飾のアレゴリーという特徴を浮き彫りにしていく。第三章では、第二章で論じきれなかった装飾における「反復」に着目し、筆者の作品とトニー・クラッグ(1949-)《分泌》(1995-6)との比較から、その特徴を分析する。筆者が独自に作成したマトリクス図を用いて、他の美術作品との比較を行い、作家の反復の独自性を明らかにする。さらに、インゴルド『ラインズ』(2014)における理論を基に、この二つの作品の反復が有機的な性質を持つことを示し、筆者の作品における手作業の反復が重要な要素であることを論じる。そして、第三章での結論は、第一章で考察した「装飾の生命力」にはやや異なる性質であることを次章の課題として示す。第四章では、第三章で明らかとなった課題を基に筆者の作品における「装飾の生命力」を、「モデルの変容」という要素に着目しながらアンリ・マティス(1869-1954)《スイミング・プール》(1952)と比較考察する。最後にこの考察によって発展させた作品として博士提出作品《生成と再生》(2024)、《Ornament Line》(2024)について述べる。結論として、「装飾の生命力」によって導かれる筆者の作品は、モデルとその源泉のイメージとなる植物を、反復やそれによって描くことができるラインの形象によって表現されるものであることを示す。